

# 砂漠の花

第二部

# 砂 漠 の 花

平林たい子 著

光 文 社

# 読者へのお願い

あなたはこの本を読まれてどんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたのお友だちや、お近くの方々に伝えてください。それといっしょに「読後の感想」を、左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、この本には一字でも誤植がないようにしたいと思っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教え願います。御職業、年齢などもお書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三

光文社出版局

神吉晴夫

昭和三十三年七月十日 月初版発行  
昭和三十三年七月二十三日 三版発行

定価二八〇円

## 砂漠の花 第二部

著者 平林たい子

発行者 神吉晴夫

印刷者 山元正宜

印刷所 三晃印刷株式会社

東京都文京区柳町二六

## 発行所

株式会社 光文社

東京都文京区音羽町三ノ一九  
電話大塚(94)一一〇〇―一九  
振替 東京一一五三四七

万一、落丁本、乱丁本がありましたら本社でお取りかえいたします。

(関川製本)

目

次

秘 奈 真 砂 孤 憂 文 新  
密 落 昼 漠 獨 悶 壇 婚  
旅 の の の の の の へ  
行 底 夢 花 獨 悶 へ 婚

二 九 八 九 五 三 三 七  
四 九 四 九 五 元 三 七

試 練

警察にて

生死の境

死を越えて

無明の妻

異郷の涙

あとがき

一三

一四

一五

一六

一七

一八

一九

装  
画  
杉  
山  
寧<sup>ニギハヤヒ</sup>

# 砂 漠 の 花

第  
二  
部



## 新 婚

### 一

汽車は、寒い一月の上諏訪駅<sup>かみずわ</sup>についた。いで湯の湯尻<sup>ゆじり</sup>が流れている駅横の裏通りに出で、勝手知った早道をぬけて行くあいだじゅう、道ばたの溝<sup>みぞ</sup>からは湯の花のおいがして、湯のけむりが上がっていた。足もとでは、凍てついた、ぬかるみ道路が、かちかちになった。

女学校時代にかよいなれた堤に出ると、はるか雪にうずもれた田んぼの彼方に、うすい朝餉<sup>あさけ</sup>のけむりをからませた自分の村が見える。そこまできると、いままで、まだいくらか疑問をのこしていた父の死が、動かしがたい事実であることが、なぜともなくはつきりした。

誰にも会わない早朝の街道を、私はハンケチで顔をおさえて泣きながら歩いて行つた。家には、親類や隣家の

人々が集まって、朝早くから葬式の準備のため、戸外で薪<sup>まき</sup>をもやししながら羊羹<sup>ようかん</sup>をねったり、膳<sup>ぜん</sup>碗<sup>わん</sup>をもち出して、あたたかい湧<sup>わ</sup>き湯で洗ったりしていた。

きのう会ったままの父は、奥の室にねていたが、一瞬に來た脳出血であるため、肉も落ちず、眠っているようだった。病気のいきさつを聞けば、きのう、近くの家に葬式があつて手伝っているところでもよめいた。

「おや、どうしたんですか。」

と、そばの者がささえると、

「どうもかるい脳充血らしい。」

と自分で言つたという。そのままそこに寝て手当をすれば、あるいは助かつたのかもしれなかつた。しかし、義理<sup>ぎり</sup>がたい田舎の習慣では、葬式でござつたがえしている家に、病人が寝させてもらうなどということは、人もわれも、思いもよらなかつた。父は人にささえられて、二町ばかりある家に歩いてかえつた。そして、寝てから一時間後には息を引きとつたという。

私は、なにか残念で、人間の血のかよっていない田舎の「義理」といったものを思いきりののしりたかつた。

が、すべてはあとの祭であった。

父は、享年五十七歳。隣村の苗字帯刀御免小泉家から養子に来て、板垣退助の自由党员だった祖父の奔放な製糸事業の失敗のあと始末に、あらましの生涯をついやした。入婿するところには、私の家は、格式ある家だったに違いないけれども、中にはいつてみれば、火の車だった。最後には、親戚に、差押さえのがれのため書きかえておいた土地が、そのままかえらなくなったりして、土地の値段以上の訴訟費用をつかうことになった。

私がおさないときの父は、よく、弓はり提灯を持って土間のくぐり戸からはいつて来た。たいてい、松本の地方裁判所に行つてのかえりだった。

母は、一生、父の犠牲の責任をおつて、ひかえ目だった。父はそうなった運命をべつに呪うわけでもなく、快活にうだつの上がらぬ境涯を村人とわらつて一しよにかこつていた。

葬式やあと始末のため、相当長いあいだ、私は家を離れられなかった。そのあいだに、誰から聞いて知ったのか、石田から使がきて、村はずれの街道まで呼び出され、

道の真中で会った。用向きはなんであつたか忘れた。たぶん小遣いでも借りられたのだろうと思う。

東京の小堀からも手紙が来た。彼は、いつまでもかえつてこない私を待ちくたびれて、「われわれ社会主義者は、いちおう肉親を捨てているはずだ。いつまでも父親の死の悲しみに沈溺していずに、かえつてほしい。」という意味を書いていた。私は、そんな論理があることは知っていたが、こんなばあいに適用すべきことなのかと思うと、異議があつた。

一切が片づいてから、私は、もらつた食糧をいくつものふろしきで包んで、夜汽車に乗った。いよいよ、すべての過去を洗いながして小堀と結婚するのだと思うと、心あらたな感激があつた。そのころ、中央線列車は中野駅にも停車したので、中野まで小堀に迎えに来てくれるように、電報をうつておいた。が、夜あけの駅に、いくつもの荷物をもつて降り立つと、迎えの人かげはない。

「これが新出発の第一日の出来事なのか。」

と、私は何かうらみがましく感慨しながら、荷物を半分だけ駅にあずけ、手に持てるだけ持つて歩み出した。高

円寺裏から、馬橋に行く田んぼ道に出て、また夜はあけなかった。暗がりでも溝に落ちて泥だらけになったまま、小堀と里村氏とが住む馬橋の家にたどりついた。

戸をたたくと、中で小堀が、寝すごしたおどろきに、床からはねおきた。見ると、二人は、一つの床にねていた。小堀は、

「時計がないもんだから、二時のとき一度、電車の音を聞いて、駅まで行っただけですよ。それから寝たら、この始末だ。」

と、弁解した。里村氏も起きあがって、にこにこしていた。私は、泣きそうになっていたらみも消えて、ふろしき包をといた。

小堀は、シャツを着たまま寝ていた。里村氏がわらいながら、

「見てください。僕はこんなひどい疥癬かいせんなんで、小堀はシャツとズボンで武装して寝るんだ。」

と自分の腕を指さした。ほんとに、すごい吹出ものが肌一面をおおっていた。このすぐあとで、里村氏は、「疥癬」という小説をかいた。その小説によると、彼の一身

上にはいろいろな悩みがあった。彼はごく抽象的にしか言っていなかったけれども、じつは逃亡兵で、そのときは変名で逃亡中だったのである。

以前、駒沢こまざわゴルフクラブのユックだった里村氏が、炊事係で、ブリキ罐を切ったかまどに拾い集めてきた薪をたいて、貰いものらしい大鍋をかけて、御飯をたいた。おかずは、魚屋からただでもらってきたという魚のあらだった。

食卓だけは足のびっこなのがかったが、各自の机はビールビールの空箱で、小堀は、一月だというのに、単衣ひとえをきていた。

本は少しだが、高価な、ブハーリンの「史的唯物論」だの、福本和夫の「社会の構成と変革の過程」などが並んでいた。三人は向かいあって、ちくはぐな茶碗で、わらいながら食事をした。

話しているうちに知ったことは、ここに二人で住む二カ月まえまで、小堀は兄と弟と三人で、野帳場のちやば歩きをしていた大工だったことだった。私はちよっとおどろいた。そういうば、食事のときのすわり方といい、た

べ方といい、髪の刈り方といい、たしかに兄ちゃんふうだった。

「立川たちかわの飯場のときにはおどろいたね。僕と弟との勘定をぜんぶ兄貴がとって、もったままもったまま丁半ちやうはんをはじめているんだ。見たら、もうあらまし取られて、われわれには煙草たばこものこらないんだからね。」

しかし、そんな経験のなかで、「ある貯蓄心」というドラマを書いたということは、やはり非凡なことである。

私は、彼のもつあらあらしい鬱悶ふもん気について行けるかどうかという不安をやっぱり感じていたが、とにかく、未来ある活気にはげまされて、日かげの苔こけのようだった生活をすっかりぬぎかえる決心をした。

## 二

その日、小堀に行ってもらって、室の荷物の始末をして、すがすがしい気持で、馬橋の小さい家にのりこんだ。

ひと通りの家財は私が持っているもので、そこにある布団や火鉢は里村氏がとることにして、その日のうち、あ

らかじめの手はずどおり、里村氏は、山田清三郎やまだ せいざう氏の前の家の二階に移った。

ぜんぜん異なった環境を歩んできた二人であつた。しかし、とにかく助けあつて、文学の仕事に精進しようという情熱を持ちよつていた。ちくはぐな鍋や、かけた茶碗の食事でも、べつに不平はなかった。食事のあいだから、私たちは議論をはじめていた。

そのころの「文芸戦線」には、ドイツやフランスのあたらしい文学理論がぞくぞく紹介されていた。雑誌の上では読んでいたけれども、その紹介者たちに伍ごして討論している彼には、とてもかなわずに、言いまかされた。しかし、北九州の生えぬぎの労働者の家庭にそだった彼と、食くしいながら多少の格式をもった中農の家に生まれた私との、物の感じ方や考え方のギャップは悲しいものだった。幼いときからの習慣で、小堀はその一日二日が食えさえすれば、それで満足して、生活のことから思案をそらしてしまふ。私はすくなくとも、一カ月ぐらいの生活の見通しを持たずには、落ちついて本を読むこともできなかった。そんなことで、夫をせめる気にもならな

いので、けっきょく私は、自分でだまって生活の才覚のために、探偵小説などを書いて売りに行った。そして、二三月のあいだに、気がついてみると、この家の経済的な負担は、全部私が自分の肩にしょいこんでいた。

人をうらむことはない。男をこんなふうに住込むのは、自分だということは、もう前から知っていた。そのことに愕然として、夫をせめると、口論になる。すでに、無形の義務が私の肩に移されているのだから、夫はその形にもう微妙になれていた。しかし、自分一人の力でさえてゆけるのなら、しいて夫の肩にそれを分けなくてはならぬという理論はないと、また思いかえして、そう強くも言わなかった。

こんなふうにして私たちの新婚生活は出発していた。私は、一度にいろいろな本を読んで、目のまえが、かつとあかるくなったような感激をおぼえて、日々を送っていた。

ところが、ある夕方、夫が会合に出かけたので、一人で窓のカギを締めて寝ようと、窓の一番上にはまっている透きガラスから外を見ると、何かの踏台にのっている

らしい石田が、室の中をのぞいていた。私は、ひどく驚いて、窓を開けないまま、

「何か用事ですか？ 何か用事ですか？」

と、ヒステリックに叫んだ。

「とにかく、ちよいとここを開けてくれ。」

私は、彼の言うとおり窓をあけた。

「お前のえらんだのは、里村かと思つたら、小堀だったのか。里村の方が、お前を幸福にする人間だぞ。ばかだなア。」

彼は、用事あり気にそんなことを言つて、煙草に火をつける。

「用事はそんなことですか。」

と、私はたたみかけて言つた。彼は、ゆっくり煙草を吸つて、せっかちな私のいらいらした言葉をゆうゆうと受けながら、

「おれにも、悪いところはあつた。お前をずいぶんいじめたからな。だが、もしお前がいま一度帰ってくれるなら、おれはいま一度やりなおすかもしれない。」

彼は、いつもの冷静さで、ぼつりぼつりと他人ごとの

ようにそう言った。

「私が、あなたのところへ帰るんですって。まっぴらだわ。もう私はひとの奥さんなんだから、こんなところまでたずねて来ないでよ。」

「いや、ここから五六軒先に、黒色青年連盟（くろしよくせいねんれんめい）の山崎がいるんでね、ちょいちょい、こちらにはくることがある。またたずねるよ。」

「お願いです。もうそんなことよしてください。私はもう、あのころの私とちがうんですから。あなたに嫌がらせられたくらいでは、負けてはいませんからね。」

こんなに堂々と宣言できるだけでも、私は自分に何かの自信がみなぎってきたことを感じた。なぜ、あんなに長いあいだ、彼の意地わるい皮肉なあつかいのもとで泣き寝入りをしていたのか、いま考えると、むしろ不可解（ふかかい）だった。

その日は、そんなことで彼はまた、ふらりと窓ガラスの外から消えた。が、門も垣根もない、むき出しの家だったから、いつでも彼がそのつもりなら立ち寄ることができる。

ある晩にも、夫が会合に行つて不在のとき、ガラスの外を見ると、また彼がのぞいていた。しかし、もう彼があけるといっても、窓をあけなかった。近所隣りをはばかりながら、私たちは、内と外とで言いあらそった。が、これといって争う材料もないので、いたずらに罵声（ののし）をひびかせるだけだった。ただ、わずかに、かつて一しよに暮らしたという記憶があるだけで、ひとりでに私たちは相当離れていた。その後も、一二回、市場の入口で出会つて、あとについてきたり、高円寺の通りでばったりと出会つたりした。

私は、このことを逐一、夫に話して、どういふ手続きをししたら、彼を来させなくすることができるか、話した。

「弱つたね。こういう問題に出合うとは思ひもかけなかったから、僕にも考えがないね。」

彼は、感慨ぶかそうに笑いながら言った。結婚など思ひもかけなかった野帳場生活から、転じて、思ひもうけない三角関係の一端になうことになった、運命の変化に、感無量の面持である。

## 三

ところが、ある晩、夫はまた会合に出ていったが、一時間もすると、しめてある玄園の外から、

「おいおい、開けてくれ。」

とたたいた。何か忘れものでもあったのかと、私が中からあげると、はいってきた小堀は、いきなり持っていた本を家の中の畳に投げつけた。はっと目を見はるまもあらせず、あとから、石田が半分のオーバーを着て、すうっとはいって来た。

「今日は会合に行くのをやめた。さっき、そこで石田君に会ったら、お前はまだ、石田君と別れてはいないと、石田君がいうんだ。それでは話がちがうから、お前と二人で対決をしてみようと思つて、引返してきた。」

私は、おどろいて、思わず大きな声でわめいた。

「何をいうんですか。別れようと言ひ出したのも、さあこれで別れたよと、本郷の二階で荷物を分けたとき、たしかめるように言つたのも、あなたの方じゃありません

か。この関係では、私は、終始、受身でした。」

石田は、そう言われてもへこたれない、不死身<sup>ふじみ</sup>とでも言いたい冷笑を頬にうかべていた。しかし、そう話がはつきりすると、いきなり小堀は石田の背をつかんだ。

「おい、君も自由を謳歌<sup>うたが</sup>するアナキストなら、女ひとりの自由ぐらい認めたらどうだ。なんだい、このあいだから、幾度も人の家をのぞいたりして、やることげちで陰険<sup>いんけん</sup>だよ。」

力のつよい小堀は、やすやすと、石田の襟がみをつかんで、彼をひねりまわしていた。ついに小堀は、石田を扉の外に突きだしてカギをしめた。

「今日の会合はやめた。」

彼は室<sup>むろ</sup>にあがつてきた。

「へんな男だ。あの男と高円寺駅で会つてから、話があるというので、へんな家に連れていかれたんだよ。表札を見ると、ファールブルの「昆虫記」を訳している安西<sup>あんざい</sup>の家なんだ。見ると、七輪にかんかん炭がおこつて、牛肉の竹皮包とすきやき鍋がおいてあつて、三四人のインテリがすわつて、茶碗酒を飲んでゐるんだ。僕はやつとち

がって、喧嘩になれているから、すぐに七輪のそばにすわってやった。もし、誰かが、なぐりかかりでもしたら、火のはいった七輪を投げつけてやろうと身がまえていたんだ。ところが、誰もなんにも言わない。どうも、様子では、みんなになぐらせようと、僕をつれていったらしいんだが、その演出はうまいかなかったんだな。」

石田のやりそうなことだと、私は溜息をついた。ながく一しよに暮らした前夫であってみれば、彼の恥は、いくら私の恥におもわれた。

「とにかく、陰険なやつだ。これから外出にも氣をつけなくちゃ。」

と、彼は私ひとりをおいて出るのが、心がかりな様子だった。

それ以来、石田はあらわれなくなった。

こんなことがあるたびに、かえって、普通の夫婦のあいだが深くなっていくものらしかった。しかし、私はかならずしもそうではなかった。あれほどはじめに経済能力のことを氣にしたのに、やっぱり同じ軌道にはまっていることを思うと、味気ない思いをして暮らしていた。

それに、日常生活の感じ方がぜんぜんちがっていることも、毎日のことであってみれば、重大だった。なんとかして、逃げ出せるものなら、逃げ出す方法はないものかと、ある時には考えた。が、山田夫妻の労をわずらわしてはいった結婚生活であるだけに、安直に別れることのできない重石<sup>おおいし</sup>がのせられていた。彼の善良さや、よい意味の単純さは、十分に認めながら、向かいあつてすわって食事をしていると、つまらないことだと思ふけれども、彼の食べ方さえ氣になる。それに彼は思わずひとりごとで、

「もう、ずいぶん、女郎買いに行かないな。」

と言ったりした。その言葉にも私はぞつとして、理屈ではない生活感情の違いを感じないではいられなかった。

しかし、そんな感情はなるべく氣持の奥に押しこんで、私は生きがいのある生活の緊張だけをたのしもうと努力した。そのころ、労働農民党の分身として、関東婦人同盟の結成が準備されて、私も委員として招待された。

そのころすでに、日本共産党は地下で結成されており、労農党や労働組合評議会が、その合法舞台での手足であ